

西尾市一色町の大提灯まつりに関する調査研究 継承のための取り組みを中心に

細井春希

【要旨】

大提灯まつりは、愛知県西尾市一色町大字一色の諏訪神社で毎年8月に行われる祭礼である。10mほどもある大提灯12張が諏訪神社の境内に揚げられ、大勢の観光客で賑わう。この大提灯は愛知県の有形民俗文化財に指定されており、観光パンフレット等でも宣伝されているが、大提灯のモノとしての側面に注目されており、大提灯まつり全体に関する記録はほとんど残っていない。本論文では、2017年、2018年の現地調査と聞き書きから、現在の大提灯まつりを記録し、大提灯まつりを継承するために地域住民が行う取り組みを探ることをねらいとする。

本論文で明らかになったことは次の3点である。

第1に、大提灯まつりは「組」の主体性が非常に強く発揮される行事である。6つの組が独自に技術を伝承し、工夫を重ねている。大字一色における「組」は単純な地域的結合ではなく、地域内で離れた場所に住んでいても同じ組になることがある、独特なものである。地域住民が「この組に入る」という意志をもって加入するため団結力が強いと考えられる。その一方で組員の減少が懸念され、大提灯まつりをはじめとする行事での人手不足が懸念されている。

第2に、大提灯まつりは形を少しずつ変えながら柔軟に継承されている。「燈明番」「赤ばんてん」といった新たな役職の登場、組でそろえられた法被など、以前と違って見える部分は、地域住民が行事を継承するために行った取り組みの結果と捉えることができる。地域で祭礼行事を継承する、という話になったとき、「以前(長老級の人が子どもだった頃)の形に戻す」ことが望ましいという考えのほかに、「現在の生活に即して、より多くの人を楽しめるようにする」という考えもあるだろう。大提灯まつりは後者の例として挙げるることができる。

第3に、大字一色では、組の氏子、一色大提灯保存会、地域の小学校がそれぞれ取り組みを行い、大提灯まつりを継承しようとしている。各組では、燈明番や赤ばんてんを選ぶ際に全員をベテラン枠から選ぶのではなく、1人は若い世代とすることにより、同時に大人数が引退し、大提灯を揚げる技術の伝承が途絶えてしまうことを防いでいる。このように同じ役割を異なる世代から出す方法は、神楽を踊る神子(各組から1人の小学生女子)の選出にも用いられている。また組員の安全確保や地域住民の動員を目指し、大蠟燭の運び方など細かな部分の変更を随時行っている。こうした変更の提案は、一色大提灯保存会や他の組に共有し、組の主体性を保ちつつ、一色全体で大提灯まつりを継承しようとしている。一色大提灯保存会では、組を超えた組織として、各組で出た変更等の意見を集約するとともに、組に所属していない地域住民にも大提灯まつりに親しみをもたせるための取り組みを行う。各組で技術伝承を行う「赤ばんてん」を承認することで行事の継承にもかか

わっている。加えて、小学校の地域学習にも協力している。小学校では、観光客に向けて大提灯まつりをアピールする活動を行っている。その際、一色大提灯保存会と連携をとって、資料館（一色学びの館）の見学や聞き取りを行っている。

以上のように、近年の大提灯まつりの現状と、地域で行う継承のための取り組みを明らかにすることができた。また小学校においては、資料館などの見学だけで過去から今までの変遷を調べるだけでなく、これからその行事がどのように変わっていくかに目を向けた学習を行うことで、子どもたちが行事を伝える主体となっていることがわかった。地域の外の人びとも取り込んで盛り上がりを見せる大提灯まつりの実態は、他の地域行事の継承にも当てはめられることができると考える。今後の課題としては、一色における「組」の特殊性を考えることや、該当地域以外の子どものも在籍する学校において、行事に実際に関わる方法を模索することが挙げられる。